

PHOTO ESSAY

西条キャンパスの自然(動物)

-2-

理学部
附属両生類研究施設

上田博 晤



Rana japonica

ニホンアカガエル

そのはかない産卵



移転の一年前からカエルの試験飼育のために西条キャンパスに通っていた時である。その頃、中央図書館と道路を隔てた駐車場は造成されたままの空き地で、直径が五メートルと二メートルほどの水溜りができていた。

一九九一年二月二十五日、その赤茶けた水底に、弱い冬の日を精一杯浴びているニホンアカガエルの卵塊を見つけた。大きい水溜りに十五個、小さい方に三個、それぞれ十センチ位の寒天質に包まれて、仁丹ほどの真つ黒な卵が五百余り、一斉に発生を進めていた。

それを見た時、労苦だけが目立つ移転にほのかな希望を感じ、新キャンパスの溢れるばかりの自然が輝きを増したのを覚えている。

やがて、おびただしいオタマジャクシが孵化した。真つ黒な十五ミリほどのその姿はまさに音符を想わせ、泳ぐ有様に思わず春の歌が脳裏をかすめた。だが、そこは餌らしいものがほとんど無い閉ざされた世界であった。

彼らはまず母親から残された寒天質を食べ尽くすと、僅かな有機物をあさっていたが、春が深まるにつれ、水が干上がり、全滅してしまった。

カエル達は何故このようなはかない産卵をしたのであろうか。卵塊数の二倍以上もの親ガエルがいて、一時的な水溜りでは繁殖できなかったということは、そう遠くない昔、この近くに優れた繁殖場があったことを想像させる。キャンパス内に点在する池は、小さなカエルを好んで食べるウシガエルと魚に占拠され、

彼らの繁殖する余地はない。

一九九二年二月十九日にも十八個と五個の卵塊がそれぞれ確認された。卵達の運命を想い、繁殖に適した場所を探したところ、両生類研究施設と植物園予定地の間で雑木に埋もれた谷間に湿地らしい場所を見つけた。あまり期待できなかったが、ノイバラをかき分けながらそこに卵塊を移した。

理学部の移転が完了して、その谷間を自然植物園の一部とすべく植物教室の人達が雑木を取り払ったあとに、なんと、六枚もの田圃の跡が現れたのである。こここそ、あのニホンアカガエルの故郷に違いない。田が荒れるに従い、彼らは去っていったのであろう。

この辺りから、四月にはシユレーゲルアオガエルの澄んだ声が、梅雨時にはアマガエルの声が風に運ばれてきたことも、大きなヒキガエルの泰然とした姿を見たという話を全て納得できた。彼らは細々ながら故郷に生き残っていたのだ。そして、カエル達がいかに強く田圃に依存しているかを改めて思い知らされたものである。

あのニホンアカガエル達のはかない産卵は、繁殖場の開拓という意味を持つのであるが、あまりに空しい結末に、人間の都合だけで生活と繁殖の場を奪われたことへの悲壮なデモンストレーションと思えてならない。

来年の夏には、水生植物園として生まれ変わった故郷に、子ガエル達が跳ね回る姿をきつと見ることができようであろう。そう祈っている。(うえだ・ひろあき)